

国際シンポジウム「人間科学と平和教育」に参加して

吉沅洪
(立命館大学)

私が初めて日中の平和について考えさせられたのは、24年前日本に来たばかりの頃だった。1988年の夏に兄と一緒に見た「火垂るの墓」という映画がきっかけだった。「火垂るの墓」は野坂昭如の同名原作に基づいて、高畑勲がアニメ映画にしたものである。1945年、つまり昭和20年の兵庫県神戸市と西宮市近郊を舞台に、親を亡くした幼い兄妹が終戦前後の混乱の中を必死で生き抜こうとするが、その思いも叶わず悲劇的な死を迎えていく姿を描いたものである。私はその映画から大変な衝撃を受けた。その時、私は初めて1937-1945年に起きた日中戦争の被害者は中国人だけではなく、日本の人々も苦しかったことが実感として分かった。

そして、2009年の秋に村本邦子先生の南京プロジェクトを知った。広島被爆者3世の笠井綾さんから、立命館大学人間科学研究所が発行される「戦争によるトラウマの世代間連鎖と和解修復の可能性～「南京を思い起こす2009」の記録」の中に使われている中国語の心理学専門用語をチェックするという仕事を依頼された。プログラムの冒頭に書かれていた「このセミナーは、異なった戦争体験と教育を受けた日本人、中国人が、日中戦争と南京の悲劇について共に学び、心を開き、お互いの声を深く聞く事を目的とします」という記述に、主催する側の姿勢、配慮を感じた。報告書を読んでいて、はるか昔に「火垂るの墓」を見た時と同じような感情が自分の中で湧き上がってくるのを心だけではなく、体でも感じたような気がする。報告書をチェックしている何日間にわたって食欲が全くなかったのだ。「加害者」(perpetrators)の日本側と「被害者」(victims)の中国側と、双方が互いに向き合い、誠実に過去の歴史について語り合っているように感じられた。「加害者」は「被害者」の「被害場所」である中国、しかも南京をあえて選んで、その「空間」で「被害者」と交流を試

み、和解修復の可能性について探ったのである。私は、村本邦子先生の勇気に驚いた。

第三回表現性心理治療国際学術研討会が 2011 年 8 月 6～9 日まで中国蘇州で開かれたが、大会のテーマは「トラウマと表現性心理治療」であった。私は村本邦子先生の仕事を大会事務局に紹介した。2011 年 8 月 6 日の開会式当日の夜、山中康裕教授の司会のもとで 2 つの基調講演があった。1 つは、中国南京大学の桑志芹教授の「南京大虐殺被害の幸存者への聞き取り調査とトラウマ治療」であり、そしてもう 1 つは、村本邦子教授の「南京を銘記する：世代間における歴史的トラウマの治療と表現性心理治療」であった。日本語では「生存者」という言葉を使っているが、中国語では「幸存者」という表現を用いられている。文化によって使われている言葉の違いは実に興味深いものであり、私の研究テーマの 1 つである。基調講演が始まる前に司会者の山中康裕先生は、「いかなる人間であれ、このような残酷な行為をしてはいけない。誰もが、そうする権力を持たない。我々日本政府はなかなか過去を認めない。けれども、私は、ここで、中国の皆様は心からお詫びを申し上げます。過去のことをお許し下さい」と涙を流しながら発言しておられた。その後、日本からの大会参加者たちも深くと頭を下げて、90 度のお辞儀をなされたのだ。これは大変勇気のいる表現であった。

「南京大虐殺」は中国人の誰にとっても、心の奥底に潜んでいる 1 つの歴史的トラウマと言えようが、日本にもこのような歴史的なトラウマを感じられる都市がある。私は 2000-2012 年まで広島市立大学国際学部で勤務していた。大学教員として働きながら、学生相談室のカウンセラー、そして県立中学校のスクールカウンセラーとして地域と関わった。そこで被爆者たちとの出会いが多々あったのだが、彼らは中国人である私に自分の被爆体験や原爆の悲惨さなどを語ってくれることは無かったように思う。しかし、いまの見事に美しく再建されている広島を見れば、被爆者たちが力強く生きた事実とうたれる。

また、私は広島市立大学芸術学部のプロジェクト「光の肖像」に関わったことがある。「光の肖像」は広島市立大学芸術学部美術学科油絵専攻が被爆体験の継承を目的として 2004 年から続けてきた美術教育の一環であり、広島被爆者の二世、三世の肖像画制作プロジェクトである。被爆 65 周年にあたる平成 22

年（2010年）には、キングストン大学（ロンドン）との共催により、被爆者、被爆二世・三世の肖像画65点の展示と、それに関連するレクチャーから構成される『「光の肖像」展 in London』（英語表記：「THE LIGHT'-PORTRAITS OF THE 'HIBAKUSHA'」）を、ロンドン大学東洋アフリカ学院附属ブルネイ・ギャラリー（ロンドン）において開催したこともある。「光の肖像」展に行くと、その数々の作品を鳥肌がたつ思いで眺めながら、どれだけ奇跡的にこの絵画が生まれたのかについて考え込んでしまう。作品展を訪れていた方々はやはり年配の方が多かった。作品のご家族、そのご友人や知人の人たちだろうか。ゆっくり座って鑑賞していたり、中には作品展のスタッフの学生たち、つまり作者たちと笑顔で言葉を交わしたりしていた。このように大事なメッセージは作品、言葉に込められてきちんと次の世代へつながり、伝えられていくだろう。

最後に「台湾芸術治療学会会訊（学会ニュースレター、2011年12月（15）」）に国立台北教育大学諮商興輔導学系准教授の頼念華頼先生が書かれた「第3回表現性心理治療国際学術研討会の参加感想をみなさんと分かち合おう」の中にあつた、「我々心理学者は、傷つけられた歴史を変えることはできません。けれども、私たちにできるのは、従来と違った視点で、あの悲しい歴史を見直すことができるのではないか」という言葉を引用させていただきたい。「火垂るの墓」のキャッチコピー、「忘れものを、届けにきました」（同時に上映された「となりのトトロ」との共通キャッチコピー）のように、みんなに忘れ去られがちである悲しい歴史の出来事を大事にしていきたいと思う。そして、自分がいまできることから始めようと素直に思う。